

《2012年4月例会報告》

【日 時】2012年4月26日(木) 19:00~21:00 (その後「ルン」~1:30 過ぎ?)

【会 場】筑波大学附属高校 3F 会議室 (東京都文京区大塚 1-9-1)

【テーマ】U-18 年代のフットサル—2001 東京、2012 名古屋、そして未来へ

【演 者】本多克己 ((株)シックス)、中塚義実 (筑波大附属高/TFA フットサル委員)

【参加者(会員) 16名】秋元大輔 (サッカーライター)、阿部博一 (日本サッカー史研究会)、奥山純一 (Web エンジニア)、金子正彦 (会社員)、※崔暢亮 (日本スポーツツーリズム推進機構会員)、白井久明 (弁護士)、白髭隆幸 (日本スポーツプレス協会)、関谷綾子 (関谷法律事務所)、高田敏志 (町田高ヶ坂 SC)、竹中茂雄 (FC 戸越)、徳田仁 ((株)セリエ)、中塚義実 (筑波大学附属高校)、中西正紀 (RSSSF)、本多克己 ((株)シックス)、宮川淑人 (枚方 FC)、持永浩史 (洗足池 FC)

※は 2012 年度からの新規入会者です

【参加者(未会員) 2名】国島栄市 (ビバ! サッカー研究会)、速水高志 (筑波大学附属高校フットサル部・女子蹴球部顧問)

【ルンからの参加者】北原由

【報告書作成者】中塚義実および本多克己

U-18 年代のフットサル

—2001 東京、2012 名古屋、そして未来へ—

中塚義実 (筑波大学附属高校) & 本多克己 ((株)シックス)

<目 次>

I. プレゼンテーション 1 : 中塚

1. 「フットサル」の誕生と東京都サッカー協会(TFA) フットサル委員会の立ち上げ
2. 東京都における U-18 フットサル大会創設の経緯
3. 東京都における U-18 大会の様子
4. 「全国大会をやろう！」—体育教官室での作戦会議

II. プレゼンテーション 2 : 本多

1. U-18 大会創設に向けて
2. 多彩な出場チーム
3. もちろん「決勝トーナメント」はない

III. ディスカッション

プレゼンテーション 1 : 中塚義実

注) プレゼン 1 は、2011 年 2 月 5 日に開かれた、東京都サッカー協会フットサル委員会主催「東京都における U-18 フットサル大会 10 周年記念シンポジウム―ユース年代のフットサルを盛り上げよう！」を 30 分に要約したものである。ここでは同報告書からの抜粋の形で紹介する。

1. 「フットサル」の誕生と東京都サッカー協会（JFA）フットサル委員会の立ち上げ

フットサルというスポーツがこういう名称で始まったのは意外と最近です。

FIFA（国際サッカー連盟）がミニサッカーを統括する動きを本格的に始めたのは、アベランジェ会長時代（1974～1998）のことです。最初は 5 a side football という言い方をしていました。5 人ずつだよということです。1989 年がちょうどその第 1 回大会。プレ大会もあって、筑波大学でチームを編成して出ようとしたこともあったんですが、FIFA 公認になる前の段階で、その大会に出してしまうとサッカーの公式大会には出られなくなるといった噂が飛び交ったり、いろいろややこしかった時代ですね。

その後 FIFA もいろいろ研究したのでしょう。1994 年に 5 a side football をフットサルと名称変更します。

JFA（日本サッカー協会）には、以前からミニサッカー委員会というのがあって、少年の全国大会はずっとやっていましたが、このときに名称をフットサル委員会に変更します。だから日本におけるフットサル元年は 1994 年だと言って良いと思います。1993 年に J リーグが発足した、ちょうどその頃の話ですね。

その翌年、JFA から各都道府県にフットサル担当者を置くよう通達が来ました。「全国大会をやるから都道府県の代表を選びなさい。各都道府県でフットサルのことを責任持ってやる人を決めなさい」ということです。その全国大会というのは、今のバーモントカップのことです。この時点ですでに何回かやっていた「全日本少年ミニサッカー大会」を引き継いだものです。一方、全日本ジュニアユースフットサル大会は新設。U-15 の大会はこの時から始まっているのです。それと、全日本フットサル選手権大会。大人の大会ですが、16 歳以上であれば参加できます。今では「プーマカップ」と呼ばれる大会も、この年に新設されました。

これだけなんです。つまりどういうことかと言うと、U-18 年代は当初から大人の категорияに含めて考えられていたわけで、U-18 だけの大会を、JFA としてはあまり考えていなかったということです。詳しい理由は分かりませんが、高校生年代って、サッカーやっている人たちはものすごく大会が多いし、そこにフットサルを入れていくことが難しかったんでしょうね。ですから高校生でフットサルやりたい人は、がんばって大人のチームに入れてもらって出してもらいなさいよということなんだと思います。今も大人のチームに出ている高校生はいますよね。

そんなわけで 1995 年から東京都サッカー協会もフットサル委員会を立ち上げようという話になりました。初代委員長は小野剛氏です。この時は成城大学の教員で、学生時代にミニサッカーに絡んだことがちょっとあったということなんです。大学の 1 級下の後輩なので、よく一緒にボールを蹴って

「フットサル」の誕生

- ◆1863年 FA創設 ...近代スポーツとしてのサッカーの誕生
- ◆1904年 FIFA創設 ...世界のサッカーの統括団体
- ◆1930年 第1回FIFAワールドカップ開催

世界各地に「ミニサッカー」があった

- ◆1989年 第1回ファイブ・ア・サイド・フットボール世界大会
 - ◆1994年
FIFAが、「ファイブ・ア・サイド・フットボール」を「フットサル」に変更
JFAが、「ミニサッカー委員会」を「フットサル委員会」に変更
 - ◆1995年
JFAが、各都道府県に「フットサル担当者」を置くよう指示
3つの全国大会を開催
 - ・全日本少年フットサル大会(既存の大会)
 - ・全日本ジュニアユースフットサル大会(新設)
 - ・全日本フットサル選手権大会(16歳以上)(新設)
- ※U-18年代は当初から、大人のcategoryに含めて考えられていた

いました。彼は翌年から JFA の技術委員会に入ってしまったので、1996 年度からは、当時 TFA 事務局長であった清水眞氏がフットサル委員長も兼任されました。3 代目が今の梶野政志さんです。

こういう形で TFA のフットサル事業が始まり、高校生年代からも担当者を出すこととなります。こういうややこしいのはたいてい「中塚がやれ」となるので、私は最初から関わっています。しかし第 2 種では全国大会がなかったため、東京都予選もなく、最初の頃はあまり仕事はありませんでした。

おまけですが、フットサルの特徴的なのは、大会ごとの登録制度です。サッカーだと、年度を通してずっと同じ人たちとチームを作る制度になっていますが、フットサルの場合、この大会はこの顔ぶれで、別の大会は別のメンバーで、というのがありなんですね。これが、多様なチームが参加できることにつながります。

大人の話ですが、1998 年からフットサルリーグができ、固定チームで 1 年間通してやるようなスタイルが導入されます。2003 年からは東京都フットサル連盟ができますが、それに先立ち、サロン 2002 では「フットサルプロジェクト」を立ち上げ、『フットサル連盟は必要か』という冊子を作成し、これからの競技団体のあり方に一石を投じました。いまの時代でも十分通用する、価値ある冊子だと思います。

川淵三郎氏が 2002 年のワールドカップ後に JFA のキャプテンになり、2050 年までに 1,000 万人の登録者という目標を掲げたときに、フットサル個人登録制度も始まりました。皆さんが大会に参加する時に個人登録するよね。そういうのがこのあたりから始まったというわけです。

2. 東京都における U-18 フットサル大会創設の経緯

そろそろ本題です。U-18 のフットサル大会がどのような経緯で始まったのかというと、2000 年度末のフットサル委員会での議論に遡ります。

「都内の民間フットサルコートで高校生が大勢プレーしているよ」ということを第 3 種担当の徳田仁さんが指摘しました。徳田さんは株式会社セリエの社長で、フットサルや草サッカーのイベントをやったり観戦ツアーを企画されていますが、フットサルのイベントを企画する中でこういうことを感じたのでしょうね。確かに、高校生でサッカー部をクビになった者や、サッカーをやりたいけどサッカー部がない者がどこでボールを蹴っているのかなと考えたときに、そのころ増えてきた民間フットサル施設で結構やっていると。これが潜在的なフットサル需要としてあるのではないかと。

TFAフットサル委員会の発足と展開

◆1995 東京都サッカー協会(TFA)にフットサル委員会設置
初代委員長は、小野剛氏(1995)
第2代委員長は、清水眞氏(TFA事務局長と兼務 1996～)
第3代委員長は、梶野政志氏(1997～ 現在に至る)

◆フットサル委員会に第2種部会設置
第2種担当者 > 第2種部会
ただし第2種としての事業は、しばらくはなかった

◆フットサルの登録制度と連盟の設立
1996 フットサル大会登録制度(大会ごとにチーム編成)
1998 東京都フットサルリーグ(固定チームで年間リーグ)
2003 東京都フットサル連盟(2000年度より議論開始)
同 フットサル個人登録制度

3

U-18フットサル大会創設の経緯

それは2000年度末、フットサル委員会の議論から始まった

◆「都内の民間フットサル施設で、高校生が大勢プレーしている」
> 潜在的なフットサル人口の存在

◆「いくつかの学校ではフットサル同好会ができている」
・筑波大学附属高校サッカー部に「フットサル部門」創設(1997)
・同校において校内フットサル大会(TFC杯)開始(1998)
> 学校におけるフットサルの可能性 > 仕掛ければ広まる!

◆「高体連のサッカー大会で、
人数不足により参加できないチームが増えてきた」
> 11人は無理でも5人なら「サッカー」の共存・共栄

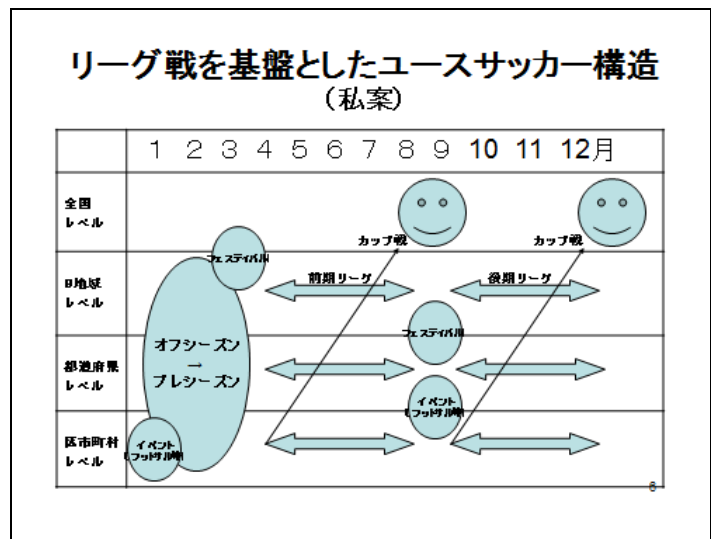
★2001年度事業として、夏にU-18フットサル大会を開催しよう!
★「東京都ユース(U-18)サッカーリーグ(仮称)」と連動させよう!

あと、「いくつかの学校でフットサル同好会ができています」という状況もありました。私は筑波大学附属高校の教員ですが、サッカー部の中にフットサル部門ができたのが1997年度です。サッカー部のバリバリの競技志向にはついていけないけど、お手軽なミニサッカーを、プレイ志向で楽しみたいと言った者が仲間を集め、サッカー部の中に新たにフットサル部門を作ったんです。この翌年はワールドカップフランス大会で、日本中でサッカーが盛り上がります。本校でもこの頃、昼休みにグラウンドでミニサッカーをやって遊んでいる生徒がものすごく増えました。「昼休みサッカー人口を吸収してイベントをやろう」となり、サッカー部主催の校内フットサル大会が始まったのがこの頃です。土のグラウンドにフットサルコートが4面作り、昼休みを使って行われる校内フットサル大会で、年2回行われます。サッカー部が審判をやります。クラスや部活の気の合った仲間とチーム作って出たりしています。「Teachers」というチームも出てきて優勝します(笑)。女子は毎回10数チーム出ているのかな。男子は15~16チーム。やりたい人はいっぱいいるということですね。

それと、もう一方で「高体連のサッカー大会で、部員が足りなくて11人制の大会に出られない」ところが結構増えてきていました。11人では無理でも5人なら何とかできるのではないかという話です。

こんな話をしながら、2001年度の夏にフットサル大会をやってみようということになりました。ちょうどこの頃、サッカーのリーグ構想も並行して動いていたので、それと連動させようということ動き出しました。

右図がサッカーのリーグ構想です。底辺で「DUOリーグ」というローカルなリーグをやっていたのを東京都全域に広げ、学校の1学期と2学期にリーグ戦をやってシーズンを明確化する。リーグ戦の合間にカップ戦がある



というような、シーズンをはっきりさせるイメージをサッカーの方で一つ作ろうと。

そうすると3学期は、サッカー的に言ったらオフシーズン、プレシーズンになります。また夏休みは、東京都では高校選手権やクラブユースの予選があるから、サッカーの人はサッカーに専念するだろうけど、サッカーをやっていない人のフットサルの場が夏にあってもいいだろうと。8月と1月にフットサルのイベントを持ってくることによって、年間を通したフットボールのスケジュールが確立するのではないかと考えたのです。

リーグ戦によって、スポーツが生活の一部になります。「リーグ戦とカップ戦の違い」から導かれた「DUOリーグの理念」は、リーグ構想を進める上での指針です。リーグに加盟するクラブは、レベルとニーズに応じてチームを編成します。一つのクラブから複数のチームが出ることによって、補欠はいなくなります。そして、リーグ戦を通してクラブが育ちます。

このようなクラブ育成の構想も含めて、2001年の夏にまず第1回大会が始まるわけです。

3. 東京都における U-18 大会の様子

1) 2001 年度

初の U-18 フットサル大会は、2001年の夏に開かれました。11クラブ12チームが参加します。優勝はエスペランサ東京A。クラブユース連盟に登録されているチームです。第2位は隼(はやぶさ)。第3位の南海老名プータは、今から考えると参加資格を満たしていなかったかもしれません。メンバーの大半が神奈川県民でした。神奈川県の高校生もフットサルをやりたい。けどフットサルの大会が

ない。チェック漏れでしたが、背景はそういうことです。第4位の農林高校は、学校の体育の授業でサッカーを選択した人たちが、夏休みに大会があるということでチームを編成して申し込んできたものです。大会ごとの登録なので、誰とチームを組んで出ても良いという大会登録制度だからできたことです。いい話でしょ。

夏の大会は「初心者でも参加でき、最後まで楽しめる競技会に！」という趣旨です。だから、初日の午前中にクリニック、午後から競技会。このスタイルは現在まで続いています。2日目の最後までゲームができるようにと、ずっとやっています。

それから、フェアプレー賞を設けています。初代フェアプレー賞は、学習院フットサルクラブ白衣軍。女子2名が入っている大学1年生のチームでした。

当時からそうだけど、我々は大会最終日までに19歳になっていなければ出ていいよと言っているの、大学1年生も誕生日が来ない人は出場OKです。白衣軍は男女の連合軍で、とても楽しそうに、フェアにプレーしていました。

それから、あまり知られていないけど、総務省が主催する「社会を明るくする運動」という、ラジオ体操とかやっている運動が冠に付いていました。というのは、日本フットサル連盟がこの運動に関わっていたこともあったからで、そのおかげで小金井市の総合体育館が借りやすくなりました。当時、フットサルができる体育館はものすごく限られていて、体育館でボールを蹴るとは何ごとだと。どうせサッカーのやつらは外靴で入ってくるだろうみたいなことを、バレーやバスケやバドミントンの人たちにも言われるし、学校体育館も使えない、地域の体育館も難しい。けど少しずつフットサルができる体育館を確保していったということです。初回は「社会を明るくする運動」事業としてやったことと日本フットサル連盟の関わりから、初日のクリニックの講師として日本フットサル連盟から、慶応大学の須田先生（日本代表コーチ）を派遣してもらいました。

当初は年1回だけやろうと言っていたんです。けど結構反響があって評判が良かったので、それに気を良くして冬もやってしまおうということになりました。この名称を見て気づくと思うけど、第1回目の夏の大会で「東京都ユース大会」という言い方をしてしまったので、違う名称にしよう。よし、フットサルチャレンジだ。夏と冬が、いまと逆になっていますね。この翌年から、趣旨と合致するように名前を入れ替えています。

冬の大会は、夏よりも競技を志向することを意識していました。それは冬場なら、フットサルクラブだけでなく、普段サッカーやっている人たちもオフシーズンにフットサルに取り組み、参加しやすくなるだろうと考えたからです。

優勝は、府中アスレティック FC ニコレッド。2位はガロ FC。2つともフットサルクラブです。3

2001年度 夏

第1回東京都ユース(U-18)フットサル大会
初のU-18フットサル大会開催(11クラブ、12チーム)

優勝 エスペランサ東京A
第2位 隼
第3位 南海老名PUTA
第4位 農林高校

- ◆初心者でも参加でき、最後まで楽しめる競技会に！
- ・初日午前中にクリニック。午後から競技会(現在に至る)
- ・4チーム3グループの1次リーグ。2日目も最後までゲームができる
- ◆フェアプレー賞を設ける！
- ・初代フェアプレー賞は「学習院フットサルクラブ白衣軍」
- ◆「第51回 社会を明るくする運動」事業として開催
- ・小金井市総合体育館が借りやすくなった
(この頃はフットサルのできる体育館が限られていた)
- ・クリニック講師は、日本フットサル連盟から派遣(須田芳正氏)¹⁰

2001年度 冬

第1回東京都フットサルチャレンジ(U-18)
夏の大会よりも「競技」を志向(9クラブ、12チーム)

優勝 府中アスレティックFCニコレッド
第2位 GALO FUTSALCLUB TOKYO YOUTH
第3位 エスペランサ東京A、エスペランサ東京B

- ◆サッカークラブも、オフシーズンのトレーニングとして参加
- 将来的には、真のフットサル東京一を決する競技会へ
- ◆スケジュール問題と会場確保の問題
- ・学校の日程&サッカー大会(高体連&CY連)との日程調整
- ・学校体育館への進出=筑波大学附属高校での開催！
- マナー向上が不可欠、しかし、ガラス割れ事件！
- ※同年開催の第1回東京都女子大会でも使用
- ◆カテゴリーを超えたイベントに！
- ・最終日の3月2日(駒沢屋内)は、第1種リーグ、女子大会と、U-18大会を並行して開催(U-15は調整できず)¹¹

位はエスペランサ東京 A と B。ニコレッドとは、高校生が悪ふざけで付けた禁煙グッズの名前です。このように、チーム名にも個性が伺えるということですね。それから、スケジュール問題と会場確保の問題。これはもう永遠のテーマで、学校の普通の日程とサッカーの競技会日程とのスケジュール調整が常にあります。

それから、このとき画期的だったのは、学校体育館に進出することができたことです。筑波大附属高校の体育館で、20m×40mのピッチでできました。

マナー向上は不可欠です。しかしガラス割れ事件が発生しました。地下1階の小アリーナを控え室に使っていて、そこではボールを蹴るなど言っているんですが、蹴る人がいたんです。ボールを蹴ってガラスを割りました。これはえらいことになりました。

最終日の3月2日は「カテゴリーを超えたイベントに」ということで、駒沢屋内競技場で第1種のリーグ戦と女子大会、U-18大会を並行して開催する形になっていました。

2) 2002～2003年度一夏と冬の名称入れ替えと U-15 との同時開催

2002年はワールドカップイヤーでした。ワールドカップが終わって、夏の大会をフットサルチャレンジとしました。夏はフットサルへのチャレンジ。名称と趣旨を合致させました。なかなか参加チームは増えません。この時は9チームでした。

冬の大会。U-15 との同時開催はここからです。U-15、U-18 の交流を進めていこうということで始めました。

判定に対するトラブル問題がありました。フットサルのルールがプレーヤー間に浸透しなかったという問題があるし、ベンチマナーの問題もありました。ベンチがプレーヤーを煽って、興奮した人たちが訳のわからないことになっていました。

引率の問題もありました。「学校運動部として参加するけど、引率はどうしたらいいんだ」ということをよく聞かれます。高体連の後援はないのか。教育委員会の後援はないのかということです。

我々としては、これはスポーツのための事業であって、学校教育のための事業ではない。学校の先生でなくても、責任能力のある大人が付いてくればいよいよという言い方でずっと展開しています。責任能力があるかどうかは、各クラブで判断してもらうしかない。育成年代の大会としては重要なことです。

2003年度夏の大会のクリニック講師はサッポさんでした。この方はJFAの特別コーチ。この翌年から代表の監督になる人です。その方がフットサルの普及も兼ねて講師を務めてくださいました。クリニックではいつも、高校生ってシャイだなんて感じるけど、この時ばかりは外人さんだということで急にオープンになったような気がします。

決勝進出の両チームは、いずれもサッカーチームでした。サッポさん曰く、「フットサルができる人はサッカーができる」とクリニックでも言っていたけど、逆に言う「サッカーができる人はフット

2002年度 夏

第2回東京都フットサルチャレンジ(U-18)

夏の大会は「フットサルへのチャレンジ！」(6クラブ、9チーム)

優勝 府中アスレティックU-18
第2位 エスペランサ東京FC・B
第3位 SEISHIN FS
第4位 筑附FC・A

- ◆名称と大会の趣旨を合致させる
- ・夏の大会は啓蒙的な“チャレンジ”大会(だからクリニックも行う)、冬の大会はチャンピオンを決する大会
- ◆参加チーム数は増えず
- ・告知と日程調整に課題あり
- ・9チームとコンパクトな大会だったので、密度濃くできた
- ◆サッカーのリーグ構想と並行しながら
- ・4～7月、9～12月にサッカーリーグ。8月は各連盟の競技会。8月のフットサルは、フットサル仲間のチャレンジ大会

14

2002年度 冬

第2回東京都ユース(U-18)フットサル大会

U-15と同時に開催(17クラブ、20チーム)

優勝 府中アスレティックユース
第2位 FC VIVA
第3位 Appeals BOTSWANA、FCイヨラース

- ◆U-15、U-18同時開催により、ユース年代の交流促進!
- ・会場確保にも好都合。その一方で引率問題もあり
- ◆判定に対するトラブル発生!
- ・ルールの理解が不十分
- ・プレーヤーを過剰に興奮させるベンチの態度にも問題あり
- ◆学校教育活動か、地域のスポーツ活動か...
- ・学校運動部が増加 → 引率問題
- ・主催者としては、「責任能力のある大人」の引率が条件
- 責任能力があるかどうかは、参加者の自己責任!

15

サルもできる」ということです。そんなことを感じたのがこの頃です。フェアプレー賞は、男女仲良くプレーしていた筑附 FC でした。

2003 年度の冬の大会。「合間にトップレベルの試合観戦」ということが日程的にも会場的にも可能だったんです。最終日、駒沢屋内で U-18 大会の準決勝が終わったあと、隣の駒沢球技場では全日本フットサル選手権の決勝が行われ、高校生も観戦に行きました。

この頃まではサッカーをやっている人たちのほうが優位でした。優勝した AC コマというのは、駒込高校サッカー部ですね。2002 年には駒込工事中というチームが同校から出ています。駒込高校が工事中だったんですね。グラウンドがなくなった彼らは、この時期にフットサルをやっていました。その翌年には一方のチームが優勝しているから、それなりのレベルにはあったんだと思います。

2003年度 夏

第3回東京都フットサルチャレンジ(U-18)

クリニック講師はサッポさん！(9クラブ、12チーム)

優勝 FC東京U-18

第2位 杉並FCユースA

第3位 府中アスレティックU-18

第4位 SEISHIN FS

- ◆クリニック講師は、JFA特別コーチのサッポ氏
シャイな高校生も、ブラジル人の指導で盛り上がる
- ◆サッカーとフットサル
決勝戦はともにサッカーチーム同士
「フットサルのできる人はサッカーができる」(サッポ)
ユースレベルでは「サッカーができる人はフットサルもできる」
- ◆フェアプレー賞は、男女仲良くプレーしていた筑附FC・A
- ◆サッカーのリーグ構想も着々と進行中
2004年度から都内全域で、レベル別リーグ開始(予定)

16

2003年度 冬

第3回東京都ユース(U-18)フットサル大会

合間にトップレベルの試合観戦！(12クラブ、16チーム)

優勝 ACコマ

第2位 フェニックスジユウガオカガクエン

第3位 都立大泉北高校、ガロFC・ウキョウユース

- ◆最終日(2/8)、全日本フットサル選手権決勝を観戦！
「する」と「みる」の融合
- ◆サッカーとフットサル
サッカーをやっている人たちのほうが優位であった(?)

17

3) 2004～2005 年度ーフットサルクラブの台頭

2004 年夏の講師は再びサッポさん。「ガラガラヘビと狐鮫」というチームは、当時、東京都のフットサルリーグで強豪と言われていたカスカベウ、いまのペスカドーラ町田が「ガラガラヘビ」。「狐」というのは、同じく関東リーグ1部でプレーしているファイルフォックス。「鮫」は、もう解散してしまっただんですが、シャークスというチーム。これも関東リーグや、10年前にプロリーグ設立を目指してやっていた関東スーパーリーグでプレーしていた強豪ですが、それらの若手の混成チームです。

この大会では、優勝したガロ FC もそうですし、府中もフェニックスも全部、普段からフットサルをやっているチームです。フットサルクラブが徐々に優勢になってきたころです。

2004 年度の冬の大会は、過去最多の 24 チームが参加しました。フットサルクラブのユースチーム、高校サッカー部のオフシーズンのトレーニングなど、いろんなところが参加してきます。高校のフットサル部・同好会も増えてきました。小中学生の頃の友人で作ったチームもあります。

2004年度 夏

第4回東京都フットサルチャレンジ(U-18)

クリニック講師は再びサッポさん！(11クラブ、14チーム)

優勝 ガロFC U-18

第2位 ガラガラヘビと狐鮫

第3位 府中アスレティックFC U-18

第4位 フェニックスジユウガオカガクエン

- ◆クリニック講師は、日本代表監督のサッポ氏
シャイな高校生も、ブラジル人の指導で盛り上がる
- ◆フットサルクラブが徐々に優勢に
決勝戦はフットサルクラブ対決。見ごたえのある好ゲーム！
- ◆フェアプレー賞は、ひたむきなプレーが共感を呼んだ「京北」
- ◆サッカーのリーグ構想は一時的に頓挫
2004年度からの創設は断念。仕切り直し
(2005年度より「Aリーグ」開始)

21

2004年度 冬

第4回東京都ユース(U-18)フットサル大会

冬のフットサル大会として定着(12クラブ、16チーム)

優勝 ラルゴFC U-18

第2位 TFC

第3位 府中アスレティックFC U-18、リアルラスカル

- ◆過去最高の24チーム参加。内訳は多種多様
・フットサルクラブのユース(U-18)チーム(ラルゴ、府中AF Cetc.)
・高校サッカー部のオフシーズンのトレーニング(筑波大附高etc.)
・高校フットサル部・同好会(成立学園フットサル同好会初参加！)
・小・中学時代の友人で作ったチームなど
- ◆最終日には全日本フットサル選手権決勝を観戦！
「観戦」も定着できはばよかったが...

23

2005年度から、アスレタがスポンサーにつくようになりました。夏に優勝したタボスというのは大学生のチームです。さっきも言ったように18歳以下ならOKというようにしています。

「早生まれ問題」というのは要するに、Jリーグの下部組織に入るくらいサッカーの能力が高い人たちは、4～6月生まれが多いということです。全国大会出場チームで調べても同じような結果がみられます。高校生くらいになるとどうってことないかもしれないけど、小学校低学年、中学年だと、4～6月生まれの、早熟で体格のいい子にポジションを奪われた早生まれの子たちは、そこでサッカーをやめてしまっているかもしれないという問題です。だから、学年でなく誕生日を一つの基準にしようというのが我々の発想になるわけです。

2005年度冬。ここでだいたい現在の形が見えてきます。最終日は筑波大附属高校の体育館。決勝戦すごくおもしろかったですね。FC東京U-18対ラルゴFC。サッカー対フットサル。ラルゴが勝ちそうだったけれども、終了直前の同点ゴールでPKに持ち込んだのがFC東京。この時のPK戦もFC東京はみんな思いっきり蹴ってズバズバ決まってラルゴの子たちがびびっていました。

2005年度 夏

第5回東京都フットサルチャレンジ(U-18)

クリニック講師は東京都選抜監督！(10クラブ、12チーム)

優勝 タボス
第2位 府中アスレティックFC U-18
第3位 FC一橋
第4位 FCキリトモ

- ◆優勝チームは大学生！
- ◆最終日の時点で18歳以下ならOKとする参加資格
- ◆「早生まれ問題」の解決策の一つ
- ◆フットサルクラブが優勢に
- ◆決勝戦はフットサル対決の見ごたえのあるゲーム
- ◆フェアプレー賞は、閉校する「FC一橋」
- ◆アスレタがスポンサーに
- ◆JFAによる「トライアルFA制度」の対象事業となる

24

2005年度 冬

第5回東京都ユース(U-18)フットサル大会

トライアルFAとして5年間を総括(16クラブ、23チーム)

優勝 FC東京U-18
第2位 ラルゴFC
第3位 府中東高校2nd、トルシーダ

- ◆最終日は筑波大学附属高校体育館で
- ◆フットサルの聖地(?)として定着、今日に至る
- ◆決勝戦は、フットサルvsサッカー
- ◆技と力の興味深い対戦
- ◆終了直前の同点ゴールでPK戦に持ち込んだFC東京U-18の勝利
- ◆トライアルFAとして報告書をまとめ、外部へ向けて情報発信！
- ◆大会ごとに作成していた報告書が生きた

25

4) トライアルFA制度を用いた情報発信 (2005～2007 & 2008～2010)

立ち上げの5年間をざっと見てきましたが、2005年度には、JFAが「2005年宣言」をし、今後進むべき方向性を世に示しました。そして「トライアルFA制度」が始まり、JFAの使命の一つとして「フットサルの普及促進」が挙げられました。

すでにU-18大会に取り組んで5年が経過しているので新規事業とは言えませんが、せっかくなので応募して、この取り組みを報告書にまとめることにしました。

2005年度、2006年度、2007年度と報告書を作り、まずは都内の関係するところに配布して、この事業をサッカーの人とか一般の人に知ってもらおうというのがねらいの一つです。さらにもう一つは、全国のフットサル関係者が集まるジョイントミーティングにおいて報告書を配布し、東京都でこういうのを始めていますからいづれ皆さんの県でもやってみましょうよと呼びかけました。いくつかの県が興味を持ってくれて、神奈川県でもはじまりましたよね。そういうところに繋がっていったんだということです。

2007年9月23日、Fリーグがはじまりました。

外部への情報発信①

— トライアルFA制度の活用(2005～2007) —

- ◆JFA・トライアルFA制度 ミッション7.「フットサルの普及推進」
2005～2007「東京都におけるU-18フットサル大会」
- ◆報告書の作成
- ◆2005年度...2001～2005の事業をまとめた活動報告書作成
- ◆※毎回作成していた「大会報告書」が役に立った
- ◆2006年度...ユース(U-18)大会の運営を中心に報告書作成
- ◆2007年度...U-18プレリーグの試みを紹介
- ◆報告書の配布とU-18大会の認知度アップ
- ◆高体連、CY連ほか、都内の関係機関に配布
- ◆...まずは都内での認知度を高める
- ◆M7ジョイント・ミーティング(2006横浜、2007大阪)
- ◆...U-18大会に関して、いくつかの都道府県が興味を示す

27

2005～2007年度にかけて、3年間のトライアルFAの試行が終わって、「次はリーグだ！」ということになりました。これは必然です。

そして、2008～2010年度と3年間にわたり、呼び名が変わって「JFA 支援制度」として、ユースリーグ立ち上げに取り組みました。年2回の大会だけでは満足できないくらいフットサルをやりたい人が出てきたことが背景にあります。そういう人たちは、うまくなりた、強くなりたと思うわけですね。選抜チームをつくろうよという話も出てきます。

自主運営できる？ 会場は取れる？ 審判は大丈夫？ 責任は？

いろいろあるけどとにかくやってみようということになりました。

2005年から2010年までの大会の部分はすっ飛ばして紹介しましたが、はじまりの10年間は、都内で立ち上げ、育てた期間です。立ち上げ育てたのは、夏と冬の競技会とリーグです。次の10年は、横と縦への拡がりを志向していこうと考えていました。

外部への情報発信②

－ JFA支援制度の活用(2008～2010)－

◆JFA・支援制度 ミッション7.「フットサルの普及推進」 2008～2010「東京都ユース(U-18)フットサルリーグの創設」

◆U-18リーグ創設の気運

- ・「もっとやりたい！」 → 定期的な試合の場の確保
- ・「もっとうまくなりた、強くなりた！」 → 競技力向上のためにクラブを超えた交流会、選抜チームの可能性
- ・「もっと広げていきたい！」 → 他の都道府県との交流・拡大

※自主運営できるか？

会場は？ 審判は？ 責任の所在は？

とにかくリーグ戦をやってみよう！

“公認リーグ”の可能性と課題もみえてくるはず...

31

「はじまりの10年間(2001～2010)」と、 「次の10年間(2011～2020)」の位置づけ

◆「はじまりの10年(創設期)」は、“都内”で立ち上げ、育てた期間である。

立ち上げ、育てたのは、

- ①普及目的の夏の大会
- ②競技志向の冬の大会
- ③フットサルリーグ

◆「次の10年」は「横と縦への広がり」を志向する

- ①横への広がり ... “関東”そして“全国”への拡大
 - ↳ 隣県との交流から全国大会の開催へ
- ②縦への広がり ... “底辺”から“頂点”までの拡大
 - ↳ 多様なレベル・ニーズに応じた事業

32

4. 「全国大会をやろう！」－体育教官室での作戦会議

私としてはこの構想を徐々に形にしていけばいいかなというつもりでした。

ただ、すでにフジテレビ系列で「夏高フットサル」をやろうという動きがある。「震災の影響で」2011年度はできなくなり、それ以降ポシャっているようですが。あるいは、民間レベルでも U-18 大会はいくつかある。

けど、どうせやるなら本格的な、オフィシャル大会まで持っていきたい。そのためには神奈川と交流しているような動きを底辺から徐々に広げていくのがいいかなと考えていたところ、2011年9月、本多さんが私を訪ねて体育教官室までやって来られました。「U-18年代のフットサルの全国大会をやろうと思うのですが…」ということです。企画書案もありました。

サロンの理事長と副理事長ということもあり、話はトントンと進んでいきます。そして今春の「プレ大会」につながっていくわけです。

ではこのあたりから本多さんにバトンタッチしたいと思います。

II. プレゼンテーション2：本多克己

1. U-18大会創設に向けて

中塚先生から、そんな話を10年来聞かせてもらいながら、私はホンダカップという、本田技研がスポンサーになってくれている大会を開催してきました。たまに勘違いしていただきますが、残念ながら私の「ほんだ」ではありません（笑）。ホンダの前はニッポンハムがスポンサーで、今年で16年目になる大会です。

参考) ホンダカップ公式サイト <http://hondacup.jp/>

全部で10の категорияがありますが、今年はいまだになかった事態が発生しています。これまではU-12やU-15の categoriaが最初に定員に達して締め切りとなっていたのですが、今年はい関東のオーバー40が最初に締め切りとなりました。今日集まっているメンバーを見ても、オーバー40が多いですが（笑）、シニア層のフットボール熱はますます高まっていると言えそうです。

この大会では参加チームを確保できるのかということで、なかなかU-18の categoriaを取り上げることができなかつたのですが、そろそろ機も熟したのではないかとということで、一昨年からU-18の categoriaを新設しました。関東、東海、関西から全国大会にチームが出てくるのですが、1年目はFリーグで開幕から5連覇を飾っている名古屋オーシャンズの下部組織のU-18チームが優勝、岡山の作陽高校が準優勝でした。昨年は面白い顔ぶれで、関東からFリーグ下部の府中アスレティックU-18、東海からJリーグ下部のFC岐阜、そして関西から高校サッカーの強豪である作陽が出場してくれました。大会では府中アスレティックU-18が優勝しましたが、作陽とのゲームは非常にすばらしいものでした。その試合を見ながらそろそろU-18の全国大会が必要だと感じました。

このホンダカップは、「ほんだ」という名前もついていますし（笑）、私にとってはライフワーク的な存在ですが、とはいえビジネスとして関わっていて、産経新聞が主催のいわゆる民間大会として成立しています。しかし、U-18大会をつくっていくにあたっては、公のU-18フットサルの全国大会にしていかなければという思いが強かったので、去年の夏頃に中塚先生に相談を持ちかけました。この下の体育教官室（注：月例会会場の会議室は3F）でミーティングして、その場からサッカー協会の関係者などに電話して、協会でもU-18大会を作らなければという問題意識を持っていることがわかりました。ただ、高体連との調整なども懸念されることから、なかなか最初の一步が踏み出せないという状況で、では協会の外にまずは民間の大会をつくって、それを公式の大会に育てて行くという方がいいのではないかという話になりました。

ここからは、お手元に配布している大会報告書に添って話を進めて行きたいと思います。

2. 多彩な出場チーム

まず、大会名を見てもわかるように「高校生」の大会ではなく「U-18」の大会となっています。身分別の大会ではなく、年齢別の大会です。

大会の趣旨にはFリーグやワールドカップで活躍する選手を生み出すということが書かれています。実はフットサルの選手の高齢化という問題があるのですが、競技の特性として、ピッチが狭いためにミ

スをするると失点に直結するということがあって、サッカー以上にリスクを冒しにくく、どうしてもベテランの選手が重用されてなかなか若い選手が使われにくいという傾向があります。そんなことからU-18大会の必要性はあるのではないかと思います。

開催概要を見ると、主催が株式会社フロムワン、シックスとなっています。フロムワンはご存知の方も多と思いますが、Jリーグサッカーキング、ワールドサッカーキングなどのサッカー出版社として非常に勢いのある会社です。そして後援に日本フットサル連盟以下、9地域の連盟に入ってもらっています。この連盟の後援名義が出揃ったのが大会の1週間ほど前になってしまいました。協会や連盟の方、そしてチームに直接に趣旨をご説明し、各地域の状況も把握したいと考えて、北海道から九州まで9地域に直接足を運びましたので、ずいぶん時間もかかってしまいました。大会が終わった今になってみれば、やはり直接出向いて、理解も深まってよかったとしみじみと感じています。

本来は、主催の次に主管が入りますが、今回は愛知県のサッカー協会、フットサル連盟に協力として名前を入れていただいて審判を派遣していただき、その他のスタッフは主催者とオーシャンアリーナを運営しているバンフスポーツで手配してもらいました。そして中塚先生には試合当日のマッチコーディネーションミーティングを全て仕切っていただいて、陰のというか、実質的な実行委員長のような役割を担っていただきました。

あとはここに高体連やクラブユース連盟などの名義も入っていただきたいところですが、初回開催ということもあって手間取り、初年度としてはここまでの名義で開催することになりました。

会場はオーシャンアリーナです。資料では大洋薬品オーシャンアリーナとなっていますが、当日に会場に行ってみるとTEVAオーシャンアリーナとなっていました。大洋薬品がTEVAというイスラエルの製薬会社を買収されたからなのですが、ここでは企画当初の大洋薬品という名前が残っています。

次に出場チームの写真が載っています。まず優勝した名古屋オーシャンズU-18は東海のフェスティバルで優勝したチームです。正式な予選があったわけではないので、この大会では予選という言葉や、代表という言葉は使っていません。出場チームは、大会主催者が各地域のフットサル連盟などの団体と調整し、原則として各地域から1チーム、計9チームを選出。選出にあたっては直近の大会結果、過去の実績などを考慮、ということになっています。

優勝のオーシャンズは大会が始まる前から優勝候補筆頭と考えられていましたが、大会が終わってから監督、選手にインタビューをすると、ひたすら反省で、ひとことも「うれしいです」とか「よかったです」という言葉は聞かれませんでした。彼らにすれば、毎日トップレベルのフットサルをやっているのに高校のサッカー部と接戦をしてはいけない、ということだったようです。

準優勝の作陽高校は、中塚先生から筑波大学つながりで野村先生を紹介いただいたのですが、ホンダカップにも毎年出場してくれていて、指導のなかにフットサルを取り入れておられるので、二つ返事でOKですということでした。そして野村先生を通して、中国の協会や連盟にも調整していただきました。

3位の松山工業は、野村先生から紹介をいただいた、四国のサッカーの強豪校です。松山工業と京都橘は6人、7人と登録人数が極端に少なかったのですが、これが後ほどお話しますが、意外な効果を見せることとなります。

一方、登録人数が多かったのが國學院久我山でした。先ほど話のあった東京都の大会の優勝チームで、その結果を受けて関東からの選出チームとするということでご了解をいただきました。高校サッカー部の最後の思い出づくりということで、20人登録して全員が出場するというポリシーで、レギュラークラスの選手から、そうでない選手までがまんべんなく出場するというチームでした。非常にポテンシャルが高いチームだったと思いますが、そういう戦い方のため4位に終わったと言えるかもしれません。

5位の京都橘ですが、関西では大阪でフェスティバルがあって、その後、名古屋の大会の1週間前に兵庫でフェスティバルがあり、どちらのチームを選出するかということになり、兵庫の大会に大阪の大会で優勝した京都橘に来てもらって、兵庫の優勝チームと橘に戦ってもらって出場チームを決定しました。

兵庫の大会では、サロンのメンバーの高原さんの宝塚FCというチームが勝ったのですが、これは面白いチームでした。宝塚FCはU-15まででU-18のカテゴリーを持っておらず、選手は滝川二などの高校やU-18のクラブでプレーしているのですが、フットサルでは年間を通しての登録ではなく、大会ごとに登録ができるので、彼らが再び同じチームでプレーできるということで、バラバラの高校のメンバーで参加して優勝してしまいました。高原さんは、サロンで中塚先生の話聞いてこのアイデアをひらめいて参加したという話をしていましたので、サロン発のチームと言えそうですが、非常にフットサルらしい出場の仕方だと思います。こういう出場の形があったことも、うれしいことでした。

北海道は、VAIN FCというクラブチームの形をとっていますが、実は北海道のフェスティバルで優勝したチームが出場できず、準優勝のチームもその高校のチームとしては出場できないということで、クラブチームとして出場してくれました。

東北は最後までチームが決まらず、フットサル連盟からクラブユースサッカー連盟に声をかけていただいて、大会の10日ほど前によく決定しました。ACアズーリというチームで、2002年にイタリア代表が仙台でキャンプを行ったことをきっかけに生まれたクラブです。

九州は、フットサル委員会の堤さんに連絡をとったところ、熊本がU-18のリーグ戦をやっているのですが、ぜひ熊本と話をしてくださいということになりました。そこで熊本にうかがって話をしたところ、単独チームではなく選抜チームで出場したいということで、選抜チームに出場してもらいました。単独チームだけでなく選抜チームでも出場できるということを示すことができ、出場の形に多様性が出せたという意味でもよかったと思います。

北信越は日本ウェルネス高校。ここは引き分けがひとつで、勝利なしに終わってしまいました。ここは日常的に授業の中でもフットサルを行っていて、普段からフットサルをプレーしている学校です。出場チームのなかでは、このウェルネスとオーシャンズ、そして熊本県選抜が普段からフットサルをやっているチームということになります。

3. もちろん「決勝トーナメント」はない

次に大会スケジュールですが、このなかで2次ラウンド、もちろん「決勝トーナメント」ではなく、「ノックアウト方式の2次ラウンド」と言うのですが、大会要項をつくるなかで、ここは決勝トーナメントではないかという指摘がありました。今日ご出席の皆様は、決勝トーナメントという表現の問題はご存知のことと思いますので、ここでは触れませんが、決勝トーナメントという表現は使わないというポリシーを通しました。

※参考：賀川浩氏による「決勝トーナメントはない論」http://library.footballjapan.jp/second_r/

続いて、大会結果。開幕戦が熊本県選抜と國學院久我山です。大会関係者はスタンドで観戦しながら、久我山がどこまでやるのかという話をしていました。正月の選手権に出場していた選手もいたので、選手のレベルが高いことはわかっていたのですが、熊本県選抜が3-2で勝ってしまいました。久我山は選手を入れ替えながらなので、ペースがつかみづらいということもあったかと思いますが、なかなかの好ゲームで、サッカーのチームにフットサルが勝ったというのは開幕戦としては悪くなかったかと思います。それぞれのグループで京都橘、名古屋オーシャンズ、松山工業が1位で勝ち上がりました。

2次ラウンドでは、松山工業が久我山に3-0と完勝するのですが、この大会を通してこの松山工と京都橘という登録人数の少ないサッカー部チームが面白い存在になっていました。メンバーが少ないために出場時間が長く、もともとポテンシャルが高い選手たちが、1試合ごとにフットサルを吸収していくのを見ていてもわかりました。たとえばオーシャンズがフットサルらしいトリッキーなプレーをすると、「あれ、やってみようぜ」ということでそれをすぐに取り入れたりしていました。本当に高校生の成長力というものに驚かされましたし、見ていて楽しかったです。

もうひとつ面白かったのは、先ほども話したように、大人のトップレベルになると、リスクを冒さないプレーがどうしても多くなるのですが、高校生たちはどんどん攻め合うフットサルをやってくれて、見ている側としては非常に楽しかったです。

掲載されている4枚は決勝戦の写真です。左上のオーシャンズの10番は得点ランキングにも入っている八木くんですね。レベルの高い選手でしたので、ひよっとするとオーシャンズのトップチームでのプレーをいつか見ることもできるかもしれません。左下のシュートを打っている選手はヴィッセルの監督もやっていた加藤寛さんの息子さんです。

決勝は、前半終了して3-1でオーシャンズがリードしていたのですが、右下の写真が残り2秒でのフリーキックの様子で、これが決まって5-5で延長戦になりました。最後はオーシャンズがパワープレーで1点を奪って勝ちきったというゲームでしたが、ほんとうにすばらしいゲームでした。

次のページには試合結果が載っています。試合No.8のオーシャンズと作陽の対戦ですが、これは1次ラウンドでの対戦です。この試合では試合の最初からオーシャンズがパワープレーを仕掛けたので、あとから監督に聞いてみると、実戦でパワープレーを試す機会がなくて、すでに2位以上での勝ち上がりが決まっていたので試してみたということでした。パワープレーというのは、キーパー、フットサルではゴレイロと言いますが、フィールドプレーヤーと同じように前にあがって攻めに参加する戦術のことです。これに対して作陽は、パワープレーされるなんて初めてのことでですから、何をどう対応していいかわからず、普通はパワープレーをされるとべったり引いて守らないといけないのに、前からボールを取りに行っても決められるという展開になってしまいました。

これが決勝になるとしっかり引いて守ることができていて、サッカーのレベルの高い選手は理解もそれをプレーに移すのも早いということが実感できました。

次のページは2次ラウンドの結果です。作陽の小野君という選手が10ゴールで得点王です。5試合で10ゴールですから得点能力の高い選手だと思っています。

次が、話がもどって大会要項ですが、真ん中あたりに参加資格があります。高校3年生も出場できるレギュレーションになっています。また、外国籍選手の出場も認めるということもあります。規定とし

てはあっても実際は出場はないかな、と思っていたのですが、オーシャンズではおそらくブラジル人だと思いますが、2人の外国籍選手が出場していました。

次のページには試合時間があります。ここは議論の余地のあるところなのですが、1次ラウンド、2次ラウンドは20分、前後半各10分です。少し短いかないという感じです。これに対して準決勝、決勝はプレイングタイムで30分間です。プレイングというのは、ボールが外に出たりして試合が止まっている時は時計が止まるということです。ですので、準決勝、決勝だけがやけに試合時間が長いということになったのですが、その他の試合時間が短かった意図は、初めて開催する大会で、いろんなレベルのチームが出てくるだろうということと、会場がオーシャンアリーナという特別な会場だったということで、大会や、会場に慣れてもらうために試合前のアップの時間、試合の合間の時間を十分取りたいということでした。そのおかげで、時間に余裕があり、運営もやりやすかったのですが、来年からは前後半15分にしていくのがいいかなと個人的には考えています。

次のページはアンケートです。9チームの監督から回答をいただいています。開催時期については意見が分かれていて、3月下旬のほかにも1月、2月という意見もありましたが、3月下旬という希望が多いです。その他の選択肢としては、中塚先生の話にあった、サッカーも含めての年間スケジュールということでは8月という可能性もあるかと思いますが、来年も3月ということになりそうです。

この時期はプーマカップが終わった直後で、実は今年は非常に残念なことに、トリムカップという全国の女子の選抜大会と日程がかぶってしまいました。そのためにサッカー協会の関係者などはすべて大阪のトリムカップに行かれており、こちらに顔を出していただけなかったのは残念でした。来年もほぼ同様の日程となるかと思いますが、トリムカップとは日程をずらして開催したいと考えています。

会場については、満場一致でオーシャンアリーナを希望ですね。選手はオーシャンアリーナできてよかったという思いを持ってくれたと思います。サブとメインのアリーナがありましたが、全チームが必ず1回はメインでプレーできるようにしました。

予選大会ができますか、ということについては、「わからない」という回答が多いのは、この段階でのアンケートでは仕方ないだろうと思います。

競技規定についてもほぼ問題なしですが、久我山からはもっと多くの選手を出したいという意見がありました。試合時間はもう少し時間を長くしてほしいという意見がありました。特に日本ウェルネス、熊本県選抜という普段からフットサルをやっているチームはもっと試合時間を長くして、できればプレイングタイムで、ということでした。

その他問題点。問題があると書いてくれたのは京都橘なのですが、兵庫のフェスティバルが大会の1週間前でしたので、1週間で準備して出場というのは大変だっただろうと思います。この時期は、強豪校はほとんどフェスティバルなどに参加している時期で、京都橘は沼津、松山工業は刈谷のフェスティバルに出場していてサッカー部のレギュラーメンバーと監督はそちらに行っていたようです。

あとは大会を振り返ってといことで、私と中塚先生のコメントが載っています。また、お手元に配布しているのが産経新聞から発行しているsankeiSALというフリーペーパーです。5月15日号で見開きで大会結果を掲載しています。最初は産経新聞が主催となる予定で、sankeiSALやホンダカップの主催もあるということで進めていたのですが、スポンサーが決まらず、主催から降りるということになってしまいました。

大会を終わって今感じていることは、今年できる最低限のことしかできなかったということです。予選もなく、9チームだけが出場ということで、スポンサーも決まりませんでした。ただ、9地域から出場チームがあり、日本フットサル連盟、地域のフットサル連盟が後援についてくれたこと、そしてそのチ

ームは満足感を持ってそれぞれの地方に帰ってくれたというということは最低でも達成できました。それぞれの地域で、あの高校が行ったのなら、うちも、という高校が出て来たりして予選が行われるようになればと思います。そして最低限とはいえ、出場してくれたチームや多くの人たちがこの大会に協力してくれたことには、ほんとうに感謝しています。

中塚：U-18年代ではオフィシャル大会がないということですが、実は仕掛けていたところはいくつかあるんですね。フジテレビが夏高フットサルということで、フジテレビがやっている春高バレー、正月になっても春高バレーですが、みたいなものをやりたいということで、予選をやって全国大会っぽいものをやっていましたね。また電通の人と協会主催の大会をしたいという話をしたこともありました。その時にイメージされていたのも、高校サッカーのようなイメージで、学校対抗の大会でした。その時にも言いましたが、学校対抗でやったのではフットサルの本当の良さはなくなってしまう、誰もが出られるようにした方がいい。この大会はまさにそのイメージ通りにスタートしているので、このコンセプトで行けば面白いものができるんじゃないかと手応えを感じています。

Ⅲ. ディスカッション

徳田：地方からの出場もあるのですが、その費用はどうなっていて、全体でどの程度費用がかかっていますか。

本多：さすが徳田さん、スバリと来ますね（笑）。北海道、東北、九州は交通費補助として10万円、その他の東海を除く地域は5万円を補助しました。チームは参加費なしで出場してもらっています。会場のオーシャンアリーナは普通の体育館とは違ってそれなりのいい値段なのですが、費用は主催のフロムワンとうちで負担をしました。うちは負担をできるような余裕がある会社では全くありませんが、この大会は間違いなくいいものになっていくだろう、化けるだろう、そうしていきたいと考えていますので、持ち出しでなんとか大会を成り立たせた、というところです。

中塚：オーシャンアリーナはいくら？

本多：メインアリーナが1時間5万円です。それが一番大きな費用です。

宮川：いろいろな狙いがあるって、レベル向上から裾野を広げることまであると思うのですが、本多さんが化けると言っているのはどういうイメージですか？

本多：最終的には全都道府県で予選が開催されて日本一を決定する大会になるのがゴールだと思っています。競技性を持った高いレベルの大会です。ただ、そこにいくまでの、サッカーでいえば90年前の状態ですから、大会をやっているところもやっていないところもある、という状態です。いろいろな地域の人と話をしていて感じたのは、フットサルをやっている人もいるし、普及させたい人もいる。さらにチームはあるけども対戦する場がない、大会がないという人たちがたくさんいて、今回こうして形をつくったことで、彼らがチームを運営したり、大会を開催していくことの意義ができたのではないかと思います。

宮川：ぼくや崔さんが出たクラブユースの大会は、クラブユースが出られる大会がなくて、先輩たちが大会をつくってくれたということなんですけど、その時の先輩たちの思いは、この子たちに競技の場を

つくってあげようということだったわけです。今回はそれと重ね合わせるのがいいかどうかかわからないけども、今は試合の場は、草フットサルレベルではあるわけです。街に行けばフットサル場、大阪でいえば8,000円～9,000円が相場なんですけど、があって、こういう全国大会がまずいるのか？ ぼくらが思うのは、まず地域レベルでできる場を作ってあげるのが先のような気がして、大阪のクラブユースのなかでフットサルをやろうという大会をつくって、フットサルをやりたいチームが出て、そういう大会を整備して、やっていくうちに関西大会がほしい、全国大会がほしいとなっていくのが普通かなという気がします。全国大会を先につくったのがどうかということですね。

本多：当然、自然発生的にそうあるべきだと思うのですが、東京都ではできていて、熊本でもできている。全国を回って大会をつくっていくということもできないので、大会をつくって、その大会に勝てばその上にこんな大会がありますよ、というものをつくるのが、今、できる仕事だったということですね。地域に大会ができていくためのきっかけをつくったという意識です。

宮川：久我山や橘が出ていますが、橘はプリンスリーグ関西にも入っている。そんななかで、フットサルもやっていこうという考え方でやっておられて、Aチームがフェスティバルに行っていて、その他のメンバーでフットサルにということですね。もっとそんな事例を紹介していくことで、橘がやっているのであれば、ということで動くチームも関西には多いし、久我山がやっているならということで東京でもやろうというチームがあるはずで、高体連を否定するのではなく、高校も巻き込んで行った方がいいし、10人おればできるわけですから。そういう増え方がフットサルにとって自然なやり方だと思います。

本多：京都橘といえば、出場の仕方もおもしろくて、まず大阪の大会で優勝したときは、高3の思い出づくりという話をされていたのが、兵庫の大会の優勝チームと対戦することになった時には、「違うメンバーでもいいですか。全国に行くのも別メンバーでもいいですか」とのことだったので、別大会だから3大会とも別メンバーでOKですと伝えたところ、しっかり別メンバーで出場されていました。おそらく兵庫で宝塚に16-5で勝った時が一番強いメンバーだったのだと思います。うまく大会を使っておられると感じました。

中塚：将来的なイメージですが、ボトムアップで行けるところは行けばいいし、トップダウンのきっかけがないと始まらない地域は、このような競技会を活用していただければいいなと思っています。参加単位も、学校で参加してもいいし、クラブユース連盟からでも、全然関係なく昔のチームメイトがこの大会のために集まってくるということでもいいと思っています。ただその時に、事故があった場合の責任は？ 今日には弁護士の方もおられますが（笑）、このような問題はあるので、責任能力のある大人が必ず帯同してくれ、ということでやれば、フットサルのU-18大会はいろんな方面にさまざまなメッセージを投げかけることができるんじゃないかと思っています。

学校の体育館はすごい財産なんです。ただ、バレー、バスケ、バドミントン、卓球あたりの既得権が強いので、公共財であるということについてもくさびを打ち込みたいと思いますね。

崔：将来トレセンがなくなるという話があって、Jの下部組織を強化すればいいだろうという考え方がある。学校単位ではなくていいと思うのですが、やるのであれば、宮川氏が言ったように、地域で固めていながら全国にということで、全国ならメディアを使ったほうがいいでしょう。それまでの各地域とのコミュニケーションが大事なんじゃないかと思うわけです。高校の体育館を使うとなれば、他の競技との取り合いがあってなかなか取れないですね。そうすれば外であるのか、という話になるとちょっと問題がある。ということで、地域のコミュニティを使うという形で、例えばフットサル

のプロ組織があるならその下部組織のなかで、カテゴリーを作ろうかということになるけども、そうすれば高校はどうなるかということになる。高校はどうかということになれば登録制の問題も出かねない。昔は読売サッカークラブが東京都の協会に所属していて神奈川県の大大会に出ていたりしたんです。それは試合をできる場所がないじゃないかということでしたが、問題が出てくると思うので、それより先に地域とのコミュニケーションをとって環境を整えていって、場所は地域のコミュニティを使うしかないと思うんです。あとは高校の枠をとっぱらった画期的なやり方ができるかということで、最初から全国ということでは1回だけで終わりということになりかねないので課題だと思います。

本多：今回、9地域を全てまわってみて、環境が違うということは本当に感じました。おっしゃる通り、地域で盛り上げて行くことができればベストで、そうするために全国大会が地域を盛り上げるきっかけになれば、と考えています。

宮川：危ないのは、クラブユース連盟でも9地域のなかでクラブユースのチームがない地域があって、四国は2チームしかなくて、街クラブがない。サッカーでもそうなので、9地域にこだわってしまうと、代表の出し方が難しくなったりする。四国には四国の選び方があって、全国同じルールでしぼると無理があるというのを感じます。クラブ連盟としては、サポートしたいという思いはありながら、方向性を見失っているところがある。全国大会はほぼ全地域Jクラブが代表になっていて、街クラブの意義がなくなって、クラブ数も増えない。100一桁台でここ数年増えていない。我々はそれを増やそうとしているけども増えない。クラブ連盟がなんらか高校と組んで、フットサルをフットボールのひとつとしてやっていけないかと思います。急に今年からということではできないけども、告知の協力といったことはできると思うので、そういうところから実績をつくって続ければいいと思う。まずやりましょう！って孫さんみたいやけど（笑）

崔：ヴェルディを始めたときに、地域が見えないとよく言われていますが、我々は地域に根ざしてやっていたんですが、まずはトップチームは株式会社にして、その下のカテゴリーは社団法人にして、私の時に登記まで終わったんですが、ベルマーレみたいにフットサルも作ったほうがいいのでは、という話もしました。ところがプロのチームを持つのはやめようということになりました。なぜかというと、小学生ですでにフットサルの大会にも出ていますし、ヴェルディとしては中1くらいまでの間に技術を学ぶ、自分たちの技術を披露する、そこでは勝ち負けは関係ない、そこでうまく覚えて覚えたものを体力をつけてユースでやっていくというような目的でやっていた。もう一つは、クラブチームに所属しているとひとつのチームで1チームしか出せない、東京都では同じ名前のチームは一つだけだったんです。そんな規制も撤廃できてクラブユース連盟とも一緒になって、学校もクラブも関係なくやれるというのが子どもたちの選択肢も増えるし、自分のうちから通えるようになる。例を挙げれば都並の息子は二子玉川から千葉の浦安まで通ったりしていたわけで、それが負担になる。環境を整えて規制を精査して横、縦の環境を整備して、何年後に全国大会をやるというのをはっきりさせて、それまでに協会の人とも協議したほうが早いんじゃないでしょうか。

中塚：クラブユースとの関係は、ぼくも以前にJCY（日本クラブユース連盟）の理事をやらせてもらっていて、その冊子（東京都U18フットサル大会報告書）を理事会に持って行って紹介したことがあります。フットサルの動向を理事の皆さんに紹介し、クラブユース連盟がこういうことの担い手になるべきだなどと言ったことを覚えています。しかし現実はまだなかなかそうもいかないし、フットサルはフットサルで連盟ができていて、そちらが担い手になりつつある。今回の大会も、フットサル連盟の後援をいただきました。それがフットサル界のオフィシャルになっていますからね。今後は、いろんな可能性を探りながら進めていくことになるだろうと思いますね。

最近の話では、東京都サッカー協会フットサル委員会で、ぼくは第2種（U-18）部会長、徳田さんが第3種（U-15）部会長です。2種、3種と分かれてやっていて、2種は高体連やクラブユース連盟の選出委員、最近フットサルリーグやっている人たちから、という感じでやっていましたが、今年度から2種・3種をとっばらって、ユース部会ということにするんです。どこかで聞いたような話ですが、ユースのカテゴリーには独特の問題があるので、大人のフットサル連盟がユースを全て見るというよりも、ユースはユースのカテゴリーで男子も女子もみるというのがいいんじゃないかということで東京都では動きはじめています（注：「ユース部会」は、2012年度については見送られた。ただ、方向性は支持されており、2種と3種の部会員は兼任、連携しながら進めていくことになった）。

宮川：組織をつくれれば作るほど、サッカーとフットサルを分けるとか、U-15とU-18を分けるとか、線引きが増えていくという問題がある。せっかくこういうもので一緒にやれる機会があるのであれば、それを抜きにしてやればいいんじゃないか。そして使える組織は使えばいい。

中塚：それで言うと、今回、熊本の人が言っていたのは、熊本の高体連にフットサルの専門部を立ち上げてほしいと働きかけているということです。熊本では高体連のお墨付きがつくことで動きやすくなるらしい。地域ごとに状況は異なるのだと思います。

宮川：関西でも高体連がつくと、先生方が公欠を取れたりするということはある。上手に使えばいい。

高田：この大会は寄せ集めのチームで参加できるんですね？ さきほどまでの話で進めていくと、クラブユース選手権やインターハイと同じになってしまうのではと思うのです。手続き上はフットサル連盟でやるとしても、例えば強いチームからメンバーを集めて出場したりできるのがフットサルのいいところだと思います。ぼくも行っている個人フットサルはほんとうに多くの人が集まっていて、9時スタートでも女性も含めて多くの人が集まっています。それがいいと思います。本質的なフットサルの楽しみ方は、規制や登録云々よりもそんなところにあるというのが現場を見ていて感じることです。他の全国大会には出れないけども、ここなら可能性があるぞ、というような、難しくない大会の方がいいのではと思います。それが魅力があって、小学生の大会でも5人制、8人制がありますが、結局主催者がJクラブを出すようになって街クラブは排除されてしまう。どの大会もJクラブが出ていて、Jクラブが出るからスポンサーからもお金が出る。でもここでは引きこもりの子どもが名古屋オーシャンズ相手に勝負ができる。それがいいじゃないですか。それがフットサルの感覚だと思います。

本多：フットサルは大会登録という仕組みがあって、それを自ずから受け入れる枠組みになっているので大丈夫だと思います。今回、高原さんの宝塚FCが寄せ集めの形で出場してくれたのは、いいモデルを提示してくれたと思っています。

高田：町田JFCもU-18フットサルに出ています。クラブにはU-18カテゴリーはないけども普段高体連でやっているメンバーが集まって出てきています。あれがいいと思います。

中塚：いまのこの仕組みで次どうするかと言うと、北海道代表は北海道で決めてもらう、決め方はどうでもいいから。ただ、誰が決めるのかだけは決めておかないとややこしいことになる。選抜でもいいし、暇だった人たちの集まりでもいいし（笑）、予選をやって優勝した単独チームでもかまわないし。それが「北海道の代表だ」と、北海道にいる人が了解すれば構わない。

奥山：大会から1ヶ月たって、静岡とかから反応はありますか？ 東海代表は愛知ですけど。

本多：東海は静岡でフェスティバルをやってくれて、磐田の高校なども出場して、その結果オーシャンズが選ばれているので、一番誰もが納得する形になっていると思います。

奥山：知らなかった、というチームがいっぱい出てくると面白いなと思うのですが。

本多：各地域で大会をやっていこうという動きはあると思います。長野ではウェルネス高校が中心になってリーグ戦をやっていこうということで、体育館を借りる体制をつくっていたりします。うちも出たかった、という反応があったとしたら、神奈川でしょうか？ 東京の大会で優勝した久我山が出場したのですが、この大会の後に神奈川県選抜が東京都選抜に勝ってしまったりして、ちょっと複雑な状況になってしまったりしていますが（笑）、そんなザワザワとしたムードが高まるのもいいかもしれません。

先ほど高田さんの話にあった、Jクラブや強豪校が出場する大会になっていったとしたら、エンジョイ系のチームが出る大会も必要になってくるから、民間のホンダカップU-18版というようなものが生まれてくるのだと思います。頂点を目指す大会があれば、その周辺や裾野が広がっていくと思います。

高田：たとえば、クラブワールドカップみたいに、ヨーロッパと南米だけ、というのではなく、必ずオセアニアも出れるみたいな。

中塚：気になることがあって、先ほど話に出たトリムカップの話です。トリムカップの発端は高知でやっていた西日本の招待大会です。ぼくも最初からかかわっていますが、最初は交流目的で来ていたところも多く、和気あいあいで行っていました。それが、大会のメジャー化ということで、日本フットサル連盟主催のオフィシャル大会として、各都道府県選抜が集まる全国大会になりました。こうすれば各地域でリーグが始まるだろう、それが女子フットサルの普及につながるだろうというねらいがありました。確かにそうなったのでよかったのだと思いますが、一方で、かつての招待大会の頃にあった和気あいあいとした雰囲気はちょっと薄れ、競技志向が優勢になってきたように思います。また、全国大会ともなるとさらにお金がかかります。高知での開催は難しくなり、今年から数年間は大阪開催になりました。オフィシャル化によってほのぼのとしたものが失われ、イベント自体が中央に、トップに持っていかれるのはよくあるケースです。注意しなければと思います。

本多：大会1日目の夜に懇親会をやったのですが、そこで熊本県の岩本さんが「ここに集まった全員が大会の発起人」という話をしてくれて、ほんとうにうれしかったのですが、今日集まったメンバーも「オレが発起人」という意識でぜひ協力いただいて、いい大会にしていきたいと思います。

以上（続きは「ルン」で）